

TYPE OF INDUSTRY



情報通信研究機構

# NICT 先端研究

## Cinet

⑰

記憶するワーキングメモリーがうまく働くと、それができなかった例がある。

ワーキングメモリーは、目標とする行動に必要な内容をしばらく覚えておく脳の機能である。私たちは、過去の出来事や知識を覚えておく長期記憶には多くの内容を留めておくことができるが、ワーキングメモリーには、わずかな内容を、しかもごく短い間しか保持することができない。

階段をあがって家の2階に行ったが、何のため2階にあがったのかを忘れてしまう。このような経験は誰でも思い当たることがあるだろう。これは、行動しながら必要な情報を

では、このようなワーキングメモリーの特徴

個人差を効果的に解析するために、独自のテストを開発して、ワーキングメモリーが早い段階から受けることを見いだした。

ワーキングメモリーは、長期記憶に比べると、加齢による影響を強く受ける。

ワーキングメモリーは、その形成の第1ステップが小学校の就学前と

その形成の第1ステップが小学校の就学前と

ワーキングメモリーは、その形成の第1ステップが小学校の就学前と

## ワーキングメモリー 加齢の影響受ける

脳情報通信融合研究センター主任研究員 **荻坂 満里子**  
京大院修了後（教育学博士）、同大助教、大阪外国語大学准教授、教授、阪大教授を経て阪大名誉教授。専門はワーキングメモリーを中心とする認知脳科学研究。



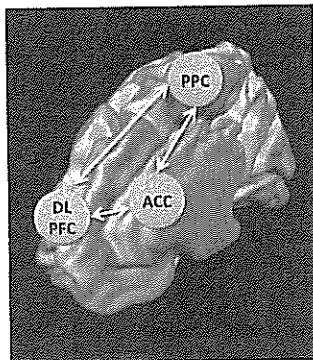
科学技術・大学

の基礎となる。

ワーキングメモリーの評価法開発で得られたこうした知見に基づいて、ワーキングメモリーを維持したり強化する方法の開発にも取り組んでいる。ここにおける脳機能の健全な発達を促す方法の開発は、高齢化社会において脳機能発達にもつながるものとして期待される。

（火曜日に掲載）

### ワーキングメモリーネットワーク



**DLPFC**  
(背外側前頭前野)  
注意の維持

**ACC**  
(前部帯状皮質)  
コンフリクト制御

**PPC**  
(後部頭頂皮質)  
注意移行、注意の切り替え